



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3785 号 2017.7.22 発行

社会 施設入所の知的障害者なお多く

毎日小学生新聞 2017年7月21日



施設の玄関口でくつろぐ入所者と職員（右）＝栃木県足利市で

定員100人以上の大規模な施設に入った知的障害者の4割以上が25年以上にわたって入所していることが、毎日新聞の全国調査で分かりました。国は障害者の地域移行を進めるとしていますが、重度・高齢の障害者が施設

に取り残されているのが現状です。

地域への移行が進まない理由について、多くの施設が「家族の反対」「入所者の高齢化」「障害程度が重い」などを理由にあげました。入所者も家族も高齢化する中、支える側が「施設に預けた方が安心」と考えるケースが多いとみられます。

また、東京都によると、都民の知的障害者のうち約3000人が、都内ではなく、東日本の14県の施設で生活していることも分かりました。この20年間で入所者は減っていません。

背中に包丁刺さった状態で…障害者施設入所男性の遺体発見、同じ施設の入所男性から事情聴く

産経新聞 2017年7月21日

21日午前1時55分ごろ、兵庫県洲本市上加茂の障害者生活訓練施設「オカピ」の2階居室内で、入所者の男性が背中に包丁が刺さった状態で死亡しているのを同施設に入所する男性が発見、110番した。

兵庫県警洲本署によると、死亡した男性は50歳代で、2人部屋の居室のベッドの上でうつぶせの状態に倒れていたという。同じ時間帯に60歳代の別の入所者の男の行方が分からなくなっており、同署員が周辺を捜索したところ、施設から約1キロ北の路上を歩いているのを発見。犯行をほのめかすような供述をしたことから同署に任意同行し、殺人容疑で慎重に調べを進めている。

同署によると、施設には2人部屋が9室あり、18人の男女が入所。遺体を発見した男性は、物音がしたので部屋の様子を見に行ったという趣旨の話をしているという。事件当時、当直の男性職員が1人いたが、異変には気づかなかったという。

現場は洲本市中心部から約2キロ。周囲は田んぼで囲まれ、住宅が点在している。病院

や施設周辺にロープを張って警察官が警戒にあたっているが、通学の中高生がときおり自転車で通過する程度で大きな混乱はなかった。近くに住む70代の男性は「夜に騒がしいことはなく、朝起きたらパトカーが来ていて何があったかと驚いた。普段は入所者との交流はなく、とくにもめごとなどは知らない」と話していた。

50代男性刺され死亡 洲本の精神障害者生活施設 事件のあった精神障害者生活訓練施設。玄関付近にブルーシートが張られている=21日午前8時30分、洲本市上加茂

神戸新聞 2017年7月21日

21日午前1時50分ごろ、兵庫県洲本市上加茂の精神障害者生活訓練施設で、50代の入所者の男性が背中を刃物で刺されて倒れているのを、別の入所男性が見つけた。男性は約1時間後に死亡が確認された。洲本署は施設から逃走していた入所者の60代の男を約1キロ離れた路上で確保し、殺人の疑いで調べている。



糖尿病児「入園ダメ」23%が経験…学会、初の調査 インスリン治療の理解不足…幼稚園や保育施設

読売新聞 2017年7月20日

子どもの時期に発症することが多い「1型糖尿病」で、患者の乳幼児の約4人に1人が幼稚園・保育施設の入園を拒否された経験があることが、日本小児内分泌学会による初の実態調査でわかった。学会は、幼稚園などの職員向けに治療法や接し方を説明した「入園取り組みガイド」を作成。病気の乳幼児の支援を求めている。

1型糖尿病の乳幼児は、インスリンというホルモンを注射で補充することで健常児と同じように生活できる。効果が長く持続する薬を自宅で打つことで、在園時は注射が必要ないことも多いという。

調査は、同学会評議員が在籍する123の医療施設に、2016年3月時点で治療中の乳幼児数と入園経験を尋ねた。24都道府県の57施設から回答があった。

回答によると、治療中の乳幼児164人のうち37人(23%)が入園拒否を経験していた。複数の園から拒否された子もあり、事例は47件に上った。「母親が常に付き添うことを求められ、断念した」などの報告もあった。

調査結果をまとめた東京女子医科大学東医療センター小児科の杉原茂孝教授は、「入園を拒否された患者が想像以上に多く、非常に残念」として、幼稚園や保育施設に対し、病気への理解を求めている。入園取り組みガイドは学会ホームページでダウンロードできる。

1型糖尿病 血糖値を下げるホルモン「インスリン」を分泌する膵臓(すいぞう)の機能が低下する病気。生活習慣病の2型と違い、自己免疫が原因とされる。小児は10万人に約2.5人の割合で発症する。

闘病ブログ、心の支えに 肉声で体験語るサイトも 日本経済新聞 2017年7月18日

6月下旬死去したフリーアナウンサーの小林麻央さんが書きつづったブログが話題になったが、ネット上では同じような闘病記が増え続けている。病気の悩みを打ち明ける患者に、同じ体験を持つ人がアドバイスや激励を書き込み、体験や情報を共有する。そこにあるのは、肉親や親友ほど親密ではないが他人の疎遠さでもない「2.5人称」の距離感。ネットで広がる共感が闘病の勇気を支える。

「短い余命が更に縮むんじゃないかと発狂しそうです」。6月初め、埼玉県に住む漫画家、つかじ俊さん(26)がブログに書き込むと、「私もどれだけ泣いたか分かりません」「克服できるよう、祈っています」と応援のメッセージが次々書き込まれた。

検診で大腸がんが見つかったのが1年半前。ステージ3だった。「日記なんて書いたこともなかったが、ブログなら気が楽。どうせなら記録を残しておきたいと思った」

■患者をつなぐ

入院中はベッドの上からスマートフォン（スマホ）を使って体調の変化を入力。ツイッターでの発信も始めたが、4月には余命を宣告され覚悟を決めた。メッセージをくれる人と面識はほとんどないが、同じがん患者同士。その一言が心を支える。

卵巣がんと闘う大阪府のサオリさん（37）もブログをきっかけに患者とつながった。「当初は周りに、同世代の患者が居なくて相談すらできなかった。不安な気持ちをほき出すためのブログだった」が、次第に同じ境遇の患者からコメントが届くように。「独りやないんや、と勇気をもらった」。がんが見つかって4年。ネットで知り合った仲間は、「友人や家族以上に素直に話せる存在」だ。

「ネット上の付き合いだけの人でも、亡くなると喪失感を感じる。それはリアルの世界と同じ」と語るのは大腸がんを経過観察中の、いきてるさん（57）。再発が不安で、自分より病が進行している人や既に亡くなった人のブログをたまに読む。そこからは病院で医師から聞く説明では分からない生と病が、よりリアルな言葉で伝わってくる。「自分の近未来を疑似体験しているのかもしれない」

ネットの中でより広範囲に交流する動きもある。ステージ4の胆管がんで、小学3年生の子供がいる西口洋平さん（37）は昨年4月、交流サイト「キャンサーペアレンツ」を立ち上げた。子供を持つがん患者に限定したサイトの登録者は1100人を超え、今も増え続ける。年齢も境遇も似かよっているから「お互い同情し合うというより、一体感の意識が強い」。

西口さん自身、サイトで交流していると「ずっと生き続けられるのではという錯覚すら覚える」という。心の癒やしやよりどころを既存の宗教に求めようという気持ちは全く生まれぬ。「むしろ、交流サイトが目に見えない神のような存在。ずっと続いてほしい」

ただ、お互いを知っているようで知らない「2.5人称」の関係には、時に不確実な情報も紛れ込む。

「突然コメントが来て読んでみたら、怪しい健康食品の宣伝だったということが、よくあります」と、ある闘病ブログの筆者は話す。特定の医療手法や医療機関を勧めるメッセージも頻繁に届く。「不安を抱えるから、思わず飛びつきそうになる。それが怖い」

■うのみは危険

闘病ブログの内容も、患者本人が書いたからといってすべてが信頼できるわけではない。患者の生の声を大学の実習に取り入れている小橋元・独協医科大学教授は「ネット上のコメントには医学的に間違った情報が含まれることもある。検証せず、うのみにするのは危険」と注意を促す。

ならばもう半歩踏み出し、2人称に近い立場で——。患者自らが登場し、体験を肉声で語りかけるサイトがある。

ネット上で自らの体験を語る秋元るみ子さん

NPOのディベックス・ジャパン（東京・中央）は乳がん、前立腺がん、認知症などの患者をインタビューし、映像をネットで公開する活動を続けている。既に約230人分を収録。医学的にチェックした上で患者の語りを公開する。「顔が見え生の声が聞こえる動画には、活字情報にはない説得力と癒やしがある」と事務局長の佐久間りかさん（57）は指摘する。

東京都の秋元るみ子さん（65）は乳がんの再発予防治療の副作用で心身共に苦しんだ体験をこのサイトで語りかけた。「私は珍しい症例だが、同じ体験をする人はいるはず。きっと誰かの役に立つ」と確信している。

■ネット時代、発信が急増

闘病記はがん患者の増加と共に増えてきた。当初は病と全面的に闘う内容が多かったが、がん告知が一般的になると、共生を主張する闘病記が目立つようになる。闘病体験を記した書籍は海外にもあるが、「闘病記」がジャンルとして確立している国は日本以外にはほと

んどない。約 1800 冊を集めた闘病記文庫がある東京都立中央図書館（東京・港）など、専門コーナーを設ける図書館も多い。

ネット時代になり、闘病の発信は飛躍的に増えた。ネット闘病記を集めるサイト「TOBYO」に登録されているブログやツイッターは 5 万 7 千件近く。毎年 5 千ほどが新たに加わる。

悲壮感は消え、身边雑記のように淡々と書き連ねる内容が大半。サイト運営会社によると約 7 割が女性患者で、最近はスマホでの入力が増えた。「文章が短くなり、絵文字が目立ってきた」

本人の死亡後も遺族らが閉鎖しなければ、闘病記はネット上に残る。故人のサイトに詳しいジャーナリストの古田雄介さんは、「定期的に追悼コメントが書き込まれ、死後も生き続けるネット闘病記がかなりある」と指摘する。（田辺省二）

就労の障害者 220 人に解雇予告 倉敷の支援 5 事業所が月末閉鎖

山陽新聞 2017 年 7 月 20 日

解雇される障害者の再就職に向けて倉敷市などが開いた説明会



倉敷市内にある障害者の就労継続支援 A 型事業所 5 カ所が今月末で閉鎖され、働いている障害者約 220 人が解雇予告を受けていることが 20 日、分かった。障害者の一斉解雇としては全国的にも異例の規模。同市などは同日、再就職に向けた説明会を市内で開いた。

市などによると、閉鎖されるのは市内の一般社団法人が運営する 4 カ所と、同法人の代表理事が経営する株式会社運営の 1 カ所。2014 年 1 月から 17 年 1 月にかけて、市から A 型事業所の指定を受けた。食品包装材加工などの軽作業を行い、7 月 10 日時点では 1 事業所当たり 14～88 人が利用していた。

同法人などが 6 月下旬に利用者と市に 7 月末での閉鎖を通知。市には「過剰な設備投資で経営が悪化したため」と説明したという。

同法人の代表理事は取材に対し、事業所を閉鎖する理由について「最低賃金が上がり、支払う固定費が増えるなどし、経営が悪化した」と答えたが、詳しい経緯は明かさなかった。

厚生労働省障害者雇用対策課は「1 度に 3 桁の障害者を解雇するというのは、ここ数年では聞いたことがない」としている。

大勢の障害者が就労の場を失う可能性があるため、倉敷市とハローワーク倉敷中央は 20 日、解雇予定者と市内外の A 型事業所など 42 施設のマッチングを図る説明会を市内で開催。障害者 68 人が参加し、各事業所のブースを回って話を聞いた。

市障がい福祉課は「一日も早く次の職場が決まるよう、相談に乗るなどサポートしていきたい」としている。

◇「ショック」「ビジネス優先か」障害者に戸惑い、憤り

突然、どうして一。障害者の大量解雇予告を受け、再就職を支援するため倉敷市などが市内で開いた 20 日の説明会。会場では障害者から戸惑いや憤りの声が上がった。

「解雇の宣告を受け、足元が崩れ落ちていくようなショックを受けた。不安で眠れなくなった」と統合失調症を患う 40 代男性。体に障害のある 50 代女性は「仕事は生きがいのそのもの。次が見つからなかったらどうしよう」と沈痛な面持ちで語った。

説明会には閉鎖する就労継続支援 A 型事業所の経営者の姿は見られなかったという。交通事故で障害を負った 60 代男性は「立ち会うべきではないか。無責任だ」と指摘した。

知的障害のある30代女性の付き添いで訪れた社会福祉法人の男性職員（46）は「ビジネスを優先し、障害者を大切にしていないから、こういう結果になった」と語気を強めた。

エイズ死者、推計100万人 国連、ピーク時より半減 共同通信 2017年7月20日
【ジュネーブ共同】国連合同エイズ計画（UNAIDS）は20日、2016年のエイズに関連した死者は推計100万人で、ピークだった05年に比べ、ほぼ半減したと発表した。抗ウイルス薬による治療が世界的に普及したのが最大の要因。

抗ウイルス薬の治療を受けた患者は16年には推計1950万人に達した。UNAIDSは「20年までに3千万人に治療を施すとの目標達成が軌道に乗りつつある」と強調した。

国連は30年までにエイズの流行を終わらせるとの計画を掲げ、全患者に抗ウイルス薬の治療を行うことを目指している。

自治体ポイント、マイナンバーに集約...9月にも 読売新聞 2017年07月20日
政府は、全国の地方自治体が健康増進や地域貢献活動などに参加した住民に発行しているポイントを「自治体ポイント」としてマイナンバーカードに合算し、買い物や公共施設などで利用できる制度を開始する。

9月にも運用を始める予定で、地域振興やマイナンバーカードの普及につなげる狙いがある。

総務省によると、全国で約500自治体が健康ウォークや特定健診などの健康事業のほか、子育て支援や清掃などのボランティアに参加した住民にポイントを発行している。しかし、自治体ごとにバラバラのポイントは使いにくいなどの声もあることから、マイナンバーカードのICチップを活用して合算し、原則1ポイント＝1円で使用可能にする。

30年度予算、社会保障費の切り込みがカギ 産経新聞 2017年7月20日

平成30年度予算案の編成では、高齢化で増える年金や医療などの社会保障費の抑制が最大の焦点となる。30年度は診療報酬と介護報酬の同時改定があり、報酬引き下げにどこまで踏み込めるかがカギだ。政府が目玉に掲げる人材投資の財源確保や、緊迫化する北朝鮮情勢に対応する防衛費の拡充が避けられない中、編成作業は困難を極めそうだ。

30年度予算の概算要求では、高齢化に伴う社会保障費の自然増が6300億円となる見込み。政府が財政健全化計画で掲げる年5千億円の目安に抑えるためには、約1300億円を圧縮する必要がある。

政府は大半を診療・介護報酬の改定で対応する構えだ。特に診療報酬では薬の価格を市場の実勢に合わせて引き下げ。医師の技術料も下げることを目指す。

臨時閣議に臨む麻生財務相（右）と安倍首相＝20日午後、首相官邸



さらに、医療・介護の制度改正でも捻出する。医療費の患者負担が重くなりすぎないように上限を設けた「高額療養費制度」で、70歳以上を対象に上限額を引き上げるなどして財源を手当てする見通しだ。

社会保障分野では、保育の受け皿を整備する待機児童対策などで新たな財源も必要で、数百億円を確保しなければならない。診療・介護報酬改定などでは与党や医療関係者の強い反発も予想され、財務省と厚生労働省の折衝は難航することが予想される。

政府・与党の歳出圧力は強い。安倍晋三政権は、目玉政策として人材投資を掲げ、大学改革や教育支援に予算を重点配分。防衛費は国内総生産（GDP）の1%弱の水準で増加

を続けているが、有事に備えて「1%超の水準に増やすべきだ」との声も強まる。

麻生太郎財務相は20日の記者会見で、「概算要求の段階から予算の内容を十分吟味し、メリハリの利いた予算編成につなげてもらいたい」と求めた。(中村智隆)

社説 来年度予算の要求基準 危機を直視しているのか 毎日新聞 2017年7月21日

国と地方の借金が1000兆円を超すという危機的な状況にきちんと向き合っているとは思えない。

政府は来年度予算の概算要求基準を閣議了解した。歳出全体の上限は5年連続で定めなかった。新たな成長戦略「人づくり革命」の関連施策に手厚く配分する方針も示した。

基準は本来、予算の膨張に歯止めをかけるためにある。財政健全化目標の達成は極めて厳しく、歳出抑制の重要性は増している。このままでは健全化は遠のくばかりだ。

上限を定めないのは、安倍政権が経済成長による税収増をあてにしているためだ。だが税収は伸び悩んでいる。昨年度は7年ぶりに減少し、追加の赤字国債発行を余儀なくされた。成長頼みは行き詰まっている。

では歳出を抑制するかというと、本腰を入れていない。むしろ財政出動を繰り返してきた。基礎的財政収支を2020年度に黒字化するという健全化目標の達成は絶望的だ。

黒字化は、社会保障などの政策経費を新たな借金に頼らずにまかなえることを示す。内閣府の試算では、現状より高い成長が続いても、20年度は8兆円超の赤字が残る。

概算要求基準は、予算を重点配分する特別枠を毎年設けている。今回は4兆円程度を用意し、人づくり革命関連の人材投資などを認める。

特別枠はこれまで従来策の焼き直しに過ぎない事業も紛れ込んできた。人材投資にかこつけた要求が相次ぎ、ばらまきに陥る恐れがある。

また、人づくり革命の柱に位置づける教育無償化は、特別枠とは別に検討するとの方針を示した。幼児教育と保育の無償化だけで1兆円超が必要とされる。財源も議論するとしているが、めどはたっていない。

政府は先月、新たな健全化目標を設けた。歳出を減らさなくても経済成長すれば健全化が進んだとみなせる指標だ。基礎的財政収支の黒字化を棚上げする布石との見方がある。

しかし、黒字化は、政府が国内外に約束してきたものだ。財政規律を軽視するようでは無責任だ。

政府の危機感が乏しいのは、国債の金利が極めて低いからだ。日銀はきのう金利水準を抑え込んでいる大規模な金融緩和策の継続を決めた。デフレ脱却どころか、野放図な財政運営を助長するだけではないか。

【主張】神戸5人殺傷 病理を解明して凶行防げ 産経新聞 2017年7月21日

凶行は防げなかったのかと、暗澹(あんたん)たる思いがする。神戸市北区で起きた5人殺傷事件は、包丁と金属バットが使われ、死亡した祖父には十数カ所もの刺し傷や殴打痕があったことから、強い殺意がうかがえる。

逮捕された26歳の容疑者は、定職に就かず、家に引きこもりがちだったという。鬱屈した疎外感が暴発したのだろうか。それとも家庭内のトラブルが原因になったのか。

事件の病理を解明しなければ、悲劇は繰り返される。

警察庁によると、昨年の殺人および未遂事件770件のうち、親族間のものは425件(55%)に上った。総数は減少したが、親族間の割合は増加している。

さらに平成26年の実態調査では、親族間の殺人や傷害致死のうち父母や祖父母が被害者になったのは35%。被害者と加害者の約8割が同居していた。

動機別では、介護や育児疲れ、金銭困窮などによる「将来を悲観」が33%、次いで「不仲・トラブル」が25%、「加害者の心神喪失」も21%あった。

今回の事件の容疑者は成人だが、少年による凶悪事件と共通する未熟さを感じる。

少年犯罪が多発した12年に岡山県で、母親を金属バットで殴り殺した少年に、岡山家裁は「情緒性が未発達で、円滑な対人関係を築く能力に乏しく、他人との共感性に乏しい」と指摘した。

また同年、大分県で起きた一家6人殺傷事件では、大分家裁が「少年は家庭で十分な愛情を受けずに生育したため、他者から自分を受け入れてもらえるかどうか常に不安を感じ、非常に強い自己防衛的な構えのある人格を形成した」と、要因として家庭・養育環境をあげた。

人格形成期における家庭の役割は、学校にも増して重要である。しかし、親は子育てに自信を欠き、叱るべきときに叱れない。

その結果、見せかけの「おとなしい」「目立たない」子が、「命の大切さ」や「やっていいこと、悪いこと」を身につけずに育つ恐れもある。

事件が起きて初めて、シグナルがあったことに気づく。が、警察や行政は家庭内、家族間の問題に踏み込むことは難しい。

親も子も悩みを内にため込まず、暴発する前に芽を摘む社会の仕組みが必要だ。

障スポ大会100日前を記念 大会特別協賛の大同生命保険、県に目録贈呈



愛媛新聞 2017年7月21日
中村時広知事に特別協賛の目録を手渡す工藤稔社長（左）＝20日午後、県庁

10月に開催される全国障害者スポーツ大会「愛顔（えがお）つなぐ愛媛大会」の100日前を記念し、同大会に特別協賛している大同生命保険の工藤稔社長（62）ら5人が20日、県庁を訪れ、中村時広知事に特別協賛の目録を贈った。

大同生命保険は1億円の協賛金を提供、関連会社も含めた延べ300人以上のボランティアを同大会に派遣する。

贈呈式では、工藤社長が特別協賛の目録を、中村知事は感謝状をそれぞれ手渡した。工藤社長は「参加する人が明るく元気に楽しんでもらえる大会にできれば」と大会の成功を期待。中村知事は、多くの人が同大会にボランティアとして参加することに触れ、「障害について考える機会にもなると思うので万全の体制で臨みたい」と話した。

開幕近づく国文祭・障文祭 奈良からはじまる - 編集委員 松岡 智

奈良新聞 2017年7月21日

第32回国民文化祭・なら2017(国文祭)、第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会(障文祭)の開幕まで40日ほどになった。9月1日から91日間、県内全39市町村での計約100のイベント内容が決定。公式ガイドブックも発行され、本番への雰囲気も高まっている。

都道府県持ち回りの祭典だが、今回は少々趣が異なる。両祭が初めて一体開催されるからだ。もともと両祭は国文祭が文化庁、障文祭が厚生労働省と所管が異なり、前々回までは開催地もほぼ別々。障文祭の実施期間はほとんどが数日程度だった。

両祭は開催趣旨も異なるが、今回は統一テーマを設定。従来の目的は残しつつ、障害の有無にかかわらず互いの芸術、文化活動を認め、楽しみながら新たな文化を発信する側面も持っている。会期中のさまざまなプログラムに手話通訳や点字訳を初導入するのも、その流れ。五感で味わう展覧会や障害者と健常者が共演する演劇、車いすダンスなどのイベントも組まれている。

もともと芸術の分野では、障害者の創作活動はエイブル・アートなどをはじめ早くから

注目されていた。芸術文化の祭典を障害のある、なしに関係なく一緒に行う下地はあったのだ。昨年の愛知県での国文祭の閉会式では、県は次回開催県として障害のある人、ない人が共演するパフォーマンスを披露し、実証している。

スポーツ分野でも近年、障害者スポーツの競技としての認知が定着。平成24年にパラリンピックを成功させた英ロンドンでは、だれもと一緒に障害者スポーツを楽しむ土壌が生まれているという。スポーツを通じた共生社会構築への遺産は3年後の東京へもつながっている。

県は祭典後、だれもが芸術文化を楽しめる状況を、県内各地で主体的に継続、定着してもらうことも目標に据える。一過性に終わらせないことが未来へ続く遺産になるからだ。下支えの部分では、一体開催で不足が懸念される宿泊施設への対応で旅行業界大手が手を組む。こうした手法も今回の奈良が基点となる。

古代国家が開いたように、奈良から文化芸術での新たな流れが始まる可能性を今祭典は秘める。内容に満足しない意見があるかもしれないが、何にせよ最初の一步は大変なものだ。来年の開催地の大分県でも両祭の一体開催が決まっている。各取り組みが今後のモデル、遺産となるように、自信と誇りを持って祭典に参加したい。

『<弱いロボット>の思考』岡田美智男著 他者と関係を築く力

神戸新聞 2017年7月21日

「ばかな子ほどかわいい」という寸言を思い出した。一人では何もできないロボットのことだ。仕方がないな、と手を貸す。これ、ロボットが人間を共同作業にいざなったと言えないか。そんなふうに本書はロボットを通して「弱さ」の可能性を探る。

著者が開発したダメロボットが次々に登場する。これが楽しい。相手の視線を追いつつ「あのね、えーとね」とたどたどしく話す「トーキング・アリー」。かわいい。「アリガトウゴザイマシタ」とちゃんと言える自販機にはちっとも愛着を覚えないのに。

両者の違いは相手との相互作用があるかどうか。壁にぶつかりつつ床を動き回るお掃除ロボットにけなげさを感じるのも、壁という環境との相互作用を見て取るからだという。

目玉ロボット「む〜」。2つ並べるとムズムズ動いて、「むむ〜」「むーむ」と言い合う。こちらが話しかけると「む〜」と反応する。かわいい。最小限の発語と反応が「何を言いたいのかな」という関心と多様な解釈を呼び寄せる。

究極は人間と手をつないで一緒に歩くだけの「マコので」。それだけで人は散歩に誘い出される。

モジモジした言動は自分の内にももる振る舞いだけではなく、実は外部と懸命に関わろうとする表現でもある。その弱さと未熟ぶりが周囲を巻き込んでいく。

高齢者や障害者といった社会的弱者が持つ可能性に思いが及んだ。一人でできないということは、他者と関係を築く力を宿しているということなのかもしれない。

(講談社現代新書 800円+税) = 片岡義博

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

